

タルコット・パーソンズ組織論について

月光恵雲

(3)

社会組織と社会又は社会外の世界との関係が注目の中心となっていたが、その内部関係に目を向けることにします。社会組織の条件の特性を特色づけるためにパーソンズが利用し、完成せねばならなかった範疇の一は均衡の範疇である。行為の組織として社会組織を考えるときに、均衡概念は物理学の概念で考えられるものであることに気づき、これがどのような意味で社会関係の中心に持ちこまれているかを考える時に明確でない点も若干見つけられる。すなわち天秤の両方の秤皿が静止して動かなくなるときに、両方の秤皿が均衡していると言われる。このように社会過程や社会構造の中で社会行為が対応するための重さと等しい物を発見することは困難であるが、パーソンズによれば個別の対象即社会組織の属性として均衡があらわれる。パーソンズは社会組織の機能能力を均衡によって定義している。そこでパーソンズは二人の行為する人、自我と他我の相互作用の組織を構成し、これが最も単純な型であって、自我の行為と他我期待、又逆に他我の行為と自我の期待が相補い、相互作用している。これを均衡していると言っている。それだから自我であれ、他我であれ、再志向することを許されない。その関係は不変に維持されていると規定されている。此の規定は自我と他我とは凡そ同価の個として、交換されていると理解されていることは明白である。このように観察された時に秤の釣合いの像が考えられる。言い換えれば自我と他我が相互依存して均衡を維持していると考えられている。然しその同価性は客観的社会関係において決定されない。すなわち二つの物体の客観的に定められた同じ重さに相当するものが自我と他我の関係には認められない。若し客観的に同価性が確かめることが出来るならば、それは社会組織の均衡の確かな指数として有効であろう。尚行為と行為期待の補足性の概念の導入は社会組織の均衡の概念を決定する為にパーソンズが用いたが、それ以上には役立たなかった。反対に補充性の概念を作ると、社会組織の属性として均衡比喩が不確実に持ち出されるより更に明確に基本的意味の補充性の概念が理解される。補充性とは二つ又はそれ以上の断片を全体として結合するとき、個々の断片の大きさは同じであることを言っている。然し補充性と均衡性が同じ意味とすると全ての断片は同じ大きさではない。それ故にその概念の間の同一性が完成される。秤の方式にすると、補充性と均衡性の同意性は900グラムの食塩が一つの秤皿に、もう一つの秤皿に100グラムの食塩が全体で1キロ包みを完成する。普通の日常取引では1キロ=900グラム+100グラムと理解される。此の相互関係期待を通じて自我の行為と他我の期待と行為、反対に他我の期待と行為は自我の行為と期待へ向くのと同じように決定される。均衡の概念は正確ではない。なんとなれば自我の自己の期待に他我の行為と期待を適応する為にどの位のエネルギーが費いやされるか。他我がどの位のエネルギーが費いやされるかは相互関係概念の中で省みられて

いない。

又単なる型として相互に対等の仲間を構成し、行為の相互作用の構造であることだけで正しく証明されない。パーソンズは人間の利害関係を示す能力で本質的に同じであるとの仮説によって社会機構を説明しようとすることは実際的でないので、社会層を強調し、種々に価値評価された行為又は役割に対する報酬の序列として表わし、社会構造理論と構造変化理論との間に行為の動機の理論を入れることで説明している。パーソンズは其中で学習論と心理分析を結合した社会化の理論を発展した。すなわち社会所与への個人の立場にしたがって一部意図的教育的に教えこまれた。一部時折人の行為の成功又は不成功を直接的に生ずる。成功又は不成功は行為に与えられる報酬又はそれに与えられる罰の程度で測られる。両方共社会的価値概念の内面化を生ぜしめる。従って人は超自我として規範に一致する行為は安定の方法となる。

統合された社会構造論を仮説される時に、その完成への発生的問題は行為の実行の機能的問題より非常に少い。その行為が社会構造を持続するとの静的観察方法による社会化過程論がある。社会組織は此の観察方法によって有機体に類似した同一性の性質を受け入れる。生命の感覚は自己主張と自己維持に向けられ、その機構の中で持続される。その持続は組織の固有の生きつづける能力が明らかに表われる。それが組織に内在する合理性そのものとして理解されることが出来る。今形而上学をすべての目的論的思考からはなれて見ると、歴史の過程でヘーゲルと同様に理性が実現するのを見る事が出来、それが生成する平等として内容的に決定し、イデオロギー的、時代的に固定され、一の立場が示され、そこから社会組織によって実現された正当性は道徳と同じく素朴なものとして示されるが強制されることはない。それは社会組織の構造合法性の中での物の度量衡原器と見なされる。その個々の道徳的証明とこれ等の量を比較し、その不足額を確認する科学意識で社会意識を判断し、革命的反対構想に向かわせられるので、科学意識と同じく、一定の特性の為に社会組織は正しい秩序が私的概念と調和するので価値の保守的なものと見られる。社会組織の機能方法に対してその個別意識が求めるところのものは不適切であるとは認められない。生命合法性を保つことはむしろ成功している。社会制度の中で具体化され歴史の教訓に反対する個別意識の過小評価はドイツ社会哲学の中でヘーゲルによって前以て準備された。ヘーゲルは制度の中に含まれた次の教訓を認めた。それが人間性の最高の実現を可能にし、同時にその批判の基準を示した。

然し構造的機能的思考はその実証性の承認を含んでいて、自身で変化するものを含んでいる。構造的機能主義は非難された時に安全でなく、このような認識の中に道徳的政治的態度が反映される。パーソンズは社会化過程をその機構の本質として解明することを余り考えていない。

国民経済の市場モデルに於ける需要と供給の均衡の概念は相互依存の一定の状態以外に考えなく、不断に反復される行為によって実現され、長く維持し、外部から妨げられないことを述べている。これとパーソンズの均衡概念と比較する時に完全に一致する。パーソンズも又均衡の下で社会行為の相互依存の状態を理解した。構造機能組織論の不均衡なもの相互依存は成層論の中に現われて来ると共に社会機能の必須の条件と見なされる。それに加えて実証的価値付与の均衡

がみとめられる。パーソンズは社会組織の安定化の両面を静的分析と動的分析によって区別をする。静的分析では一定の与えられた均衡状態として社会組織を観察し、その過程を追究する。その過程は均衡状態を正しく維持し、これを実行する決定的機能力として社会統制力を認める。社会統制は逸脱行為傾向の発生の反面であり、逸脱行為傾向に反対しがちである社会組織の過程とかような過程に働く条件の分析である。逸脱論の如くその組織又は下部組織の一定の均衡状態に相対的に述べられねばならぬ。その均衡状態はその下部組織の中で制度化された規範の特殊化とそれの逸脱と遵奉に相対する動機の力の均衡を含む。この理由で相互依存過程の安定した均衡は逸脱の行為に対してと同様に社会統制に対する基本的関連点である。均衡は純粋な形でほとんどあらわれない。そこでパーソンズは次のように規定する。

此の后者は理論関連点である。経験的事実で社会組織は完全に均衡し、統合しない。逸脱動機の要素は常に働いていて、それ等が適切な行為者の動機組織から除かれないように安定している。その場合に社会統制はそれらの除去でなく、それ等の結果の制限と或る制限をこえて他のものに拡散を防止することを明らかにしている。社会統制機構の機能は組織に取り入れられた均衡状態にあり、個々の学習過程の中で働く。その過程の中で社会否認の経験からその回避の方法が行われる。そこでは独特の社会化過程から区別されない。若しパーソンズの差別基準に一つの意味を与えようとするなら、社会化の実証的意味に於いて差別するよりしない方法を学んだ方がよい。すなわち社会化過程の社会統制を限定することは困難であろう。組織の均衡は個々の精神過程の中で均衡する。最小統一体を作り出す社会行為が統合される。その時に社会化過程の中で形作られた文化価値に志向された社会期待を完成する。此の期待に実際に応ずることは行為傾向の中にある。少くとも社会組織の全体理論は此の仮定から始まる。

基本的関連枠は一状況の中で目標又は満足状態の求める過程として行為を処理する。満足と損失の極限はその行為の二つの基本的傾向—探求と回避—此の概念では固有である。期待の概念の中に公式化され、未来への関連はその通りである。しかも行為は期待をさげねばならぬ時に行為者は負担を中断されるのを見るであろう。行為動機構造のさらに良い見解の経過として形成される。それで未来に対して期待に値する行為を保証し、社会均衡を妨げる異常が除かれる。社会変動が調べられる前に社会の静的構造分析で此の均衡の探究をパーソンズは必須なものを見なしている。その基準点から此の変動を認め、その方向と速度が一定となる。パーソンズは動的分析としてこの課題の解決を示した。静的なものとは異って組織内部の過程を処理するのではなく、組織の過程を処理する。パーソンズ理論は静的分析と同様に動的分析は基本である。パーソンズは次の事を意識している。完全な統合状態又は絶対均衡状態は実際には存在しないと、動的分析を考える時必ず大きな関係の大きさとして理想的均衡状態が研究される。このような均衡状態の理想型的性格が明らかな時その関係の大きさ—機能に対して反対する。パーソンズの組織略図はひそかに経験的組織の基礎を描くことを希望する。なんなれば統合概念を実際に理想型に制限することはパーソンズには困難であった。再三再四パーソンズは彼によって示された狭い効用枠を見失った。そうして統合は社会行為の経験的に見出される構造の正常な場合として明らかに考えられる。

動的分析も又静的分析の統合状態を仮説する時、経験現象としての変動は経験現象としての均衡状態から出発する。此の状態は社会行為によって実現されると、その性質によって満足へ向けられ、制裁をさけること求める。この事が社会行為を成功させ、期待に対応した時に構造的に反対する期待の可能性は除かれるが、全ての行為は統一的な全社会組織を包括する文化的価値を生ずる。

そうしてそれと調和する静的分析の立場から社会組織の象徴として統合と均衡が示される。一方を調べるものは他方を仮説する。然し組織が統合された社会期待を意味する時には実際にターレンドルフが主張したように闘争を組織の内的条件から説明されることは出来ない。統合と組織が同意概念となると闘争と組織は矛盾せねばならぬ。その源にかかわらず、そこから構造的変動は流れ出る。パーソンズの証明によれば組織の内部条件から生ずるもので、その為に分類せねばならぬ動的分析は組織内部の変動理論として闘争に打ち当てることはない。社会組織の爆発的変化が社会的対立を導いて来る事が出来るようにその組織の中で予見されない。この事は次の事を実証的に意味する。社会組織は均衡を失うであろうが、同じ組織のままであって、変動の中で均衡の新しい状態で傷つけられると、社会組織そのものの均衡は多くの内部の下部均衡から成り立っていて、相互入りまじっている。そうして親族集団、社会層、教会、宗派、企業、政党のような種々の均衡した組織を作り上げ、内部均衡の中に多かれ少かれ人格組織を伴っている。人格又は社会領域の中の下部組織の不安定が大組織を不均衡にし又はその一部を不均衡にすると同時に伝えられた巨大な動いている均衡に全てのものが入る。遂には両均衡が行われるか又は全体的均衡はその型を変化する。

動的分析の最も重要な課題は普遍的な方向線の作製でなければならぬ。そうしてその変動過程に従わねばならぬ。それは有機的成長の中で変動の生物学的理論を有しているのと同様である。この問題に直面して次の事は偶然ではない。パーソンズが認め、内因外因によって区別した社会変動の全原因の研究にパーソンズが没頭した学問の制度化においてパーソンズは社会組織の顕著な例が変動を解決する行為方法を合併し、その中で構造組織を受け入れることを発見した。それで統合された組織をきずつけられることはない。それだから科学はその本質によって修正され、それ以外にそれ自体孤立化することは不可能と思われるが、科学の発見は技術が発見すると同様に技術的実験によっておしすすめられる。すべて社会組織に余すところなく影響を及ぼす。ここから科学が制度化された作戦的位置が割当てられる社会は静的社会である筈がない。どの方向に進むかということを見ることが困難でなく、パーソンズは関心を持ち、特にそれを認めた。社会に効果のある科学の発展の作戦的意味が認められるところに当然変動が進化としてあらわれる。マックス、ウェバーによって引用された概念で合理化過程として特色づけられた、パーソンズの言によれば、社会組織の中で我々が変化の指向性傾向について話す時に我々は経験的普遍化を直接に述べている。社会組織の変化の中で一般的指向要素としてかなりの確信を以て合理化の過程を述べる事が出来る。

社会行為の概念からパーソンズは社会組織を導き出した時、社会組織による社会変動の評価を

特に注目されないであろう。合理化の中で変動の道と始めに与えられた目標は最高実行能力で推論される。実際の社会組織は理念型の統合から逸脱するところに満足の最高化への傾向は変化の一要素として働く。なんとすれば特別の社会組織の中で住民の中の一定集団と実際の集団の理念型である。ますます嵩まる満足への運動は合理化の過程の書替えにすぎない。ますます完成し、全体と部分の関係での最高合理性と完全統合は究極状態である。たえずそれを達成しようと努力する。それにもかかわらず決して統合されず、行為する者が完全な満足することの出来ない基礎の一はその環境が絶えず変化する状態であるからである。不完全な統合の中にある変動の内的原因と変化する環境に起因する外部原因は今後存在するために組織に適合せねばならぬ。此の関係が与えられるので社会組織は妨害に反応することが出来る。そうしてそれを最小限の被害で除かれる方法がある。異常の行為に修正への圧力が行われる。闘争によって引きさかれぬ為に組織は何らかの方法で異常の行為を統合せねばならぬ。そのまま残る方法は積極的作用によってそれを除かれない時はその機能変更である。その試みの中で組織そのものが他のものに順応させる、換言すれば組織は組織の構造の中で変化する時、自己の均衡を取りもどすことが出来る。異常の行為からの妨害が特に重要であるなら、以前からの構造は状況によって放棄され、新しいものにかわらねばならぬ。それで新しい均衡が形成される。一つの均衡状態から他の均衡状態への変化の過程はパーソンズによって述べられていない。極限安定はサイパネステイクな概念の基礎でパーソンズが社会組織の機能方法で発展したものである。パーソンズは限界の中に維持している。統一体として社会組織を理解する。限界維持としての組織の定義は次の事を言っている。

環境に関しては環境要素の中の変動に関連しているので、一定性が静的か、動的かは型の或る一定性を維持している。型の一定性の此の要素は組織の中の過程の分析の為の基本的関連点を構成せねばならぬ。然し勿論これらは経験的一定性である。一定の関連枠内に恒常性が存在することをたびたび発見されることは事実である。それらの存在によって示された問題に理論の中心を置く事が出来る。組織の過程は構造の型を肯定する限りではそれは機能として重要であり、逆機能としても重要である。構造変動の場合に此の型は変化する。この変化への能力が組織に負うところの大なもの次は次の事である。

その環境の中で変化によって生き残っている、その限界内で維持される、機能概念に於ける組織の構造分析の理論からその変動の理論の移行で重要な意味転移が完成した。それを動機論の通路によってパーソンズが作った、構造分析の理論は組織の全体構造型の一定性にもとづく。それだから既に変動の概念は構造の典型の変動を仮説する。変動の中に組織の可能性がある。その環境に対して限界内の特殊性の条件を維持することは変動を解決する経過の逆機能として最早や観察されることは出来ない。パーソンズは闘争について彼独特の仮説を持っている。パーソンズが悩んでいる困難は彼の公式の中までしみ通っている。均衡概念は組織がそれ自体の構造の基本的変化がなく、変化中の環境によって課せられた緊急事と調和し又調和の失敗、構造変化限界を維持し、組織としての解体のような過程、病的性格の第二構造の確立に到達するいくらかの有害の結合を経験する過程を分析するための基本的関連点である。パーソンズは不明瞭な言で彼の詩の

中の欠けている韻を無視しようと試みた。調和する組織の能力の、反対として一方で此の定理の中で構造変化があらわれた。他方解体と有害の種類として実証として明らかでないし、一定の組織の否定として明らかでない。構造変動を二分した評価をパーソンズは理論形成の概念から逆機能として定めた。それに対して適応能力のある有機体としての社会組織の概念から十分に機能能力があるとして認めている。理論的に均衡の概念は唯一の意味で規範的関連性を持っている。社会組織の構造は制度化された規範文化の中にあるので、この規範型の維持は組織の均衡を分析する為の基本的関連点である。けれどもこの維持は実際に生ずるかどうかが、そうしてどんな測定かは全く経験的問題である。さらに不均衡論は構造変化に到達する。そうして高い位置の規範的見地からそれは好ましい。理論的と経験的との相違。それと共にこの説の中に変動の過程の機能的等価が作られる。パーソンズはそれを合理化として解釈しようとは思わない。このような変動は理論的にも、経験的にも均衡の維持として述べられない。その導入はパーソンズの構造機能主義の理論的構造を破壊する。

参 考 文 献

- Talcott Parson ; The Structure of Social Action, New York, 1949
ditto ; The Social System, New York, 1952
ditto ; Toward a General Theory of Action, New York, 1952
ditto ; Family, Socialization and Interaction Process, New York, 1955
ditto ; Economy and Society, London, 1957
Ralf Dahrendorf ; Sozial Klassen und Sozial Klassen – Konflikt in der industriellen Gesellschaft, Stuttgart, 1957
ditto ; Homo Sociologus, Köln, 1968
ditto ; Pfade aus Utopia, München, 1963
ditto ; Die angewandte Anflklärung, München, 1963
ditto ; Gesellschaft und Demokratie in Deutschland, München, 1968